子供・子供・子供

――皇軍慰問の抜書より――

内山憲堂

東京私立幼稚園聯盟を代表して、山内勇仙、加藤武夫の兩君と小生の三人で五月二十六日東京を立ち、長崎から上海に渡つて、上海、南京、蘇州、杭州等の海軍陸軍の皇軍を慰問して六月二十日東京へ歸つた慰問帖から「童心」を拾つて見ました。

A　兵隊さんは子供

◇

幼稚園代表――どうしても、私たちは漫談や、浪曲や獨唱を持つては行けない立場に置かれてゐる。戰場で生命を懸けての丁半勝負に馴らされた、荒武者たちが受けてくれるかどうか解らないが、どこまでも幼稚園代表らしく、ぶつかつて見やうではないかと、代表者三人相談をして、童話と繪噺と人形芝居を持つて行くことにした。私の人形芝居も、新作を避けて、常に幼兒に見せ、幼兒にやらせてゐる、「笑の風」と「舌切雀」を持ち出した。

六月四日上海陸戰隊第二大隊本部で、最初の幕は切つて落とした。ビクビクしながら演じたが、その結果我々の今日までの杞憂は全然吹き飛ばされて仕舞つた。兵隊さんたちは繪噺、人形芝居の内へ入り切つて、心からの笑ひを爆發させ、

子供の樣に手を拍つてよろこんでくれる。童心そのものである。

私たちは今回の慰問旅行に於ける二十數回の慰問を通じて、幼兒に見せるのと何等變らない氣持ちで話し得た結論は「兵隊さんは子供である」と云ふことであつた。

◇

上海で慰問をしたときの事である。慰問を了へて部隊長の部屋で休んでゐると、隣りの士官室から、ピーピーと云ふ時ならぬ笛の音『サテは、支那軍が遺棄した例のチャラメロの樣な支那ラッパを吹いてゐるのかな』と思ひながら覗いて見ると、士官たちは今着いた慰問袋の中に入つてゐたゴム風船をふくらましてはピーピーならしてゐるのである。その打ち興じ笑つてゐる樣子は、髭面の尉官殿とは思はれない、どうも幼稚園の子供である。

◇

航空隊の本部も二三ヶ所慰問した。梅雨期に入つた連日の雨で、一息入れてゐる飛行士たちは部屋の中には納まつてゐない、演藝會が開かれて、ハチ切れる元氣を爆笑に晴らしてゐる。漫談あり浪曲あり、流行歌に舞踊、萬才、聲色、端歌、詩吟等各種各樣のものが飛び出して來る。そしてすべてが無邪氣で、恰度中學生の卒業の時に於ける演藝會を見てゐる樣である。慰問に行つた我々が腹を抱へて笑はされて仕舞つた、こちらが慰問された形だ。

是が支那全土を震駭させ、世界各國の耳目を驚かした荒鷲であらうか、どうしても無邪氣な中學生としか考へられない。

◇

軍艦朝日へ慰問に行つた。七時からやつてくれとのことで、夕飯を馳走されてまだ少し時間があるので甲板から黃浦江の景色を眺めてゐた。

甲板では當番士官が水兵たちを指圖して夕方の仕末をしてゐる。中尉か大尉らしかつたが背が高く、カイゼル髭の嚴めしい士官である。やがて「水兵米を持つて來い！」と命令を下した。米をどうするのかと見てゐると、水兵の持つて來た米を受取ると、マストの方を向いて、しきりに何か呼んでゐる。マストから下りて來たのは二羽の鳩である。

士官は米を甲板へ撒いて、鳩に與へると鳩はうれしさうに米を喰べて、士官が踞んでゐる足の下まで來る程に馴れてゐる。

その姿はどう見ても嚴めしいカイゼル髭の士官ではなく、淺草の觀音樣の前で鳩に豆をやつてゐる幼兒である。

話に聞けば、その鳩は支那の迷ひ鳩が軍艦へ來たので飼つてゐるのださうな、なほ更面白さを感じた。

B　支那の子供たち

◇

大綱を誤つた蔣介石のために支那の良民たちがどんなに苦しんでゐるか、こゝにも支那の子供たちの哀れな姿を澤山に見せられた。

◇

汽車で驛へつくと、驛の附近の子供たちが二十人も三十人も汽車の窓の下へ來て「煙草進上！」「めし進上！」とやつて來る。「煙草下さい、食物下さい」と云ふ意味である。煙草は親に、食物は自分等の空腹を滿たすのである。汽車が進行し出してもどんどん追つかけて「進上々々」とやつて來る。一錢の銅貨、一本の空瓶でも與へると、それを拾ふために、泥の中を、轉びながら奪ひ合つてゐる、その樣子は實に氣の毒な程である。

◇

部隊へ行くと、子供たちが、兵隊さんの殘飯を貰ひに來てゐる。庭の掃除をしたり、片付けものゝ手傳ひをしたりして、殘飯を貰つて行くのである。大きな部隊などになると、入れ物を持つた子供たちが、一丁あまりも行列をしてゐることがある。

◇

南京の私たちの泊つてゐる旅館の前に支那の子供が遊んでゐる。十一二の姉らしいのに抱かれてゐる三つ四つ位の小さい子供が、實に可愛らしいので、すつかり仲よしになつて、お菓子か何かやらうと思つたが、恰度持ち合せがなかつたので銅貨を一枚與へた。

子供たちはどこかへ行つたが、暫くすると三つ四つの子供を連れた、三組も四組もがやつて來て、僕たちの前へ子供を見せにやつて來る、これには、さすがに閉口をして旅館へ飛び込んだ。

◇

軍閥政治の壓制や、支那兵の暴戾にビクビクしてゐた支那民衆も、日本の溫い手には限りなきよろこびを感じてゐる、ここに純眞なる子供たちにこの姿を明らかに見ることが出來た。

◇

杭州西湖を案內していたゞいたのは、曹洞宗出身の淸水副官である。駒大在學中から子供の仕事には興味を持つてゐられただけあつて、支那の子供たちまでも「シミスさん」となついでゐる。西湖の島へ渡る小舟にも女の子が三人ばかり同船して、嬉々としてゐる樣子はトーキーにも撮りたい位であつた。

◇

隊へ時々遊びに來る子供たちは「さよなら」「お早やう」位の日本語は自由に使用する。「白地に赤く」だとか「もしもし亀」だとか「愛國行進曲」などを上手に歌ふ。子供たちの歌ふ「露營の夢」を速記して見た、

カッテクリソト　イシャマシク
チカッテクニチ　テタカラ　ハ
テカラタテスニ　シナリヨウカ
シンクンラッハ　キキタヒニ
マフタニウカヒ　ハテノナム

◇

杭州で支那人の小學校へ慰問に、紙芝居と人形芝居を持つて行つてやつた。三組を一つにして、見せてやるのであるが、一番小さい組の女の子が二人、恐ろしがつて、どうしても來ない。先生に、すかされながら泣き泣き後の方へ入つて來て見てゐたが、しまひにはすつかりよろこんで、歸る時には、「さようなら、さようなら」とみんなと一緒に送つてくれた。

◇

南京で、夕方散歩に出て、宿の近くに燒け殘つた小さいお寺へ入つた。十三四の男の子がゐたので、銅貨を四五枚やつたら、すつかりよろこんで、「觀々」と言ひながら、本堂横の「觀音樣」から、裏の「娘々廟」からすつかり案内してくれて、ありつたけの鐘をカーンカーンとたゝいて見せてくれる。その姿が實に、うれしさうで、四五錢で思ひがけない功德をしたと自分ながらうれしくなつた。

C　子供を考へる

こんごの慰問の旅で私の一番感激したことは、部隊長に逢つて「防備の完全なこの戰鬪によく勝利を得られましたね」と申し上げると、その部隊長も口を揃へて「いや兵たちがよく働いてくれますからね」と言はれるのである。何と云ふ有り難い言葉であらう。親心である。親が子供の働きを心からよろこぶのと少しも異らない。

督戰隊を有する支那軍とは正に反對である。この親心があり、兵は上官を助けてこそ日本軍の强さがあるのである。

◇

妻を忘れ、親を忘れた兵士たちは、全く子供になつて、上官を親として敬ひ、親しんでゐるし、兄弟を忘れ、子供を忘れた、上官たちは兵を子供として慈しんでゐるのである。こゝにも童心は生れてゐる。

◇

戰ひに破れ童心を失ひ、向上心も希望も、よろこびも持たない國民程氣の毒なものはない。汽車に集つて日本人に一本の煙草を乞ひ、殘飯の列に先を爭ふ光景を見た。

◇

南京の飛行場へ行つたら、支那人が人夫として、飛行場で働いてゐる、彼等は、飛行場の地ならしをしたり破壞された飛行機を片づけたりして、一日働いて來て米一升貰つて行くのである。その米は支那軍が殘して行つた糧食庫の米であると聞いた。何と云ふ、みぢめなことだらう。自分の國の飛行場、しかも、自分の國の飛行機の片づけをして、自分の國の米一升を貰つてよろこんで働いてゐる支那人——何と云ふ哀れなことだらう。

◇

戰爭は綱引きの樣なものである。戰ふ以上は、勝つか負けるかの二つしかない。しかも負ければどこまでも引きづられ

るのである。

「戰爭には負けてはならない」これは部隊長の言葉だけではない。まざまざとその實證を見せられた。

◇

我々幼兒教育者は大いに考へなければならない。我々の幼兒の時代に、幼兒が綱引きに負ける樣なことがあつては先祖に對して申し譯がない。

◇

支那の町を歩くと、幼兒たちまでも街頭で物を賭けて勝負事に熱中してゐる樣子を見る。國民性は幼兒の時から作られるのである。

◇

我國の優れた民族性を生かす、立派な國民性を幼兒の時から植ゑつけると共に、精神肉體共にどこまでも强く正しく育てゝ行かなければならないことが、今回の旅全體を通じて私たちに與へられた教訓であつた。

小西信八翁には本月五日八十五歳の高齡を以て長逝せられました。本會は我國幼稚園教育の先驅者としての翁の大なる御功績に對し謹で哀悼申上げます。

日本幼稚園協會